

向井俊彦著『唯物論とヘーゲル研究』（文理閣）

鱈坂真

一

本書は向井俊彦氏がここ七年余の間に雑誌などに発表してきた九篇の論文を収めたものである。いずれもヘーゲル哲学やマルクス主義哲学に関連した論文であるが、それぞれが近年のわが国のマルクス主義あるいは唯物論の立場に立つ哲学者の間で深く関心がもたれ、あるいは複雑な論争ともなっているテーマとかかわっており、本書のもつ意味はけっして小さくないと思われる。向井氏は日本科学者会議や全国の哲学研究者の「若手シンポジウム」などの活動の中で、これらの仕事を積み重ねて来て、いわば中間総括として、ここに一書を編むことになったのであろうが、この仕事の達成はなかなかのものであって今後この第一段階での仕事を土台として一層の活躍が期待される。

向井俊彦著『唯物論とヘーゲル研究』（鱈坂）

本書は三部からなっている。第一部は方法論あるいは認識論に関する四篇の論文からなり、第二部は史的唯物論に関する三つの論文からなり、第三部はヘーゲル哲学についての哲史的研究の二つの論文からなっている。

第一部における向井氏の仕事は弁証法論理学と形式論理学との関係についての近年の諸論争にかかわっており、しかも論理学上の問題だけでなく、広く方法論あるいは認識論の分野にまたがる現代哲学の最先端の問題にかかわるものである。この問題は分析哲学とマルクス主義哲学との鋭い対立点をなしているばかりでなく、近年、わが国ではマルクス主義哲学（唯物論哲学）の内部での論争点ともなっていて、大層重要な根本的な問題である。

第二部の史的唯物論にかかわる三つの論文は、マルクス主義哲学（唯物論哲学）の内部で戦前から論争になっており、ひ

きつづき今日でも問題になっている「実践」概念あるいは「主体性」の概念についてのものである。特にこの問題についての向井氏の仕事はこれらの論争の渦中に一石を投ずる重要性をもっていると思われる。

この書評はこの第一部と第二部を中心として行うこととする。

二

第一部の諸論文のうち、「ヘーゲルによる分析的方法と総合的方法の批判について」と「分析的方法を基礎とする弁証法的方法とはどういうものか」の二篇が、とくに論理学や認識論についてのわが国の学界の最近の論争にかかわっている。

マルクス主義哲学あるいは弁証法的唯物論が論理学あるいは方法論として弁証法をかかっているのに対して、分析哲学あるいは新実証主義の哲学が形式論理学の厳重な遵守を主張して、弁証法に反対していることは周知のところである。ここからややもすると弁証法と形式論理学とは相容れることのない、両立しえない立場のように思われる傾向があり、また科学方法論の面ではこの形式論理学を基礎としているの

が分析的な方法であるところから、この分析的方法は弁証法とは相容れることのない方法であるかのように思い、したがってまた分析的方法はマルクス主義の諸科学の方法論としてはとらざるところであるかのように思う傾向が一部に生じていた。ひいてはマルクス主義の弁証法は分析的方法の対極にあると思われる総合的方法と一義的に結びついていると考える傾向さえ生じていた。このような傾向は国際的にもあったし、わが国では戦前の唯研の人々にも強かった。今日においても弁証法の特徴をその「内在的考察の態度」と「歴史主義的見地」と「総体性の立場」の三つに求めて、つまりは弁証法の総合の面だけを見て分析の面を見ない立場がいまだに存するということを指摘しておかなければならない。

しかしこのような考え方、つまり弁証法が正しいとすれば直ちに形式論理学は誤りであり、同時にこれと結びついている分析的方法は真の科学の方法とは言えないというこの考え方が、正しいとはいえないことは諸科学の現実の発展の姿あるいは科学史上の事実にてらして明らかであるばかりか、たとえばマルクスやエンゲルスなど古典家たちの見解にてらしても明らかであった。一九五〇年代前半のソ連を中心とした

東欧諸国のいわゆる「形式論理学論争」は起るべくして起つた。わが国でもこれに関連して当時はいくつもの論文が書かれた。そしてほぼ次のことが確認されたといえよう。弁証法に対立するのは(古典家たちの用語からみても)けっして形式論理学ではなく、それは「形而上学的思考」であること。この形而上学的思考とは形式論理学と分析的方法の一面的絶対化のことであつて、形式論理学自体は一定の限界内で妥当する思考法であり、この限界とは、いわゆる「日常的、常識的思考」の枠内であること。

大体において以上のことが確認されたのであるが、問題がすべて解決したわけではなかつた。さまざまな論理学上、方法論上、あるいは認識論上の問題が残つていた。それらの問題のうち的主要なものは、弁証法と形式論理学の関連をどうみるかという問題、また分析的方法と総合的方法との関連の問題であつた。

弁証法と形式論理学との関連についていえば、ほとんどすべての唯物論者・マルクス主義者において一九五〇年代以後形式論理学は「日常的、常識的思考」の枠内で妥当するもので、いわば初歩的な論理であり、弁証法はそれに対して高次

向井俊彦著『唯物論とヘーゲル研究』(鱒坂)

の論理であることは一致して主張されてきたが、しかし兩者の關係は必ずしも明確にされたとはいえない状態であつた。

この問題について、はじめて明確な解答を与えたのが六〇年代以降の見田石介氏の業績であつた。見田氏は『資本論』の徹底した研究を通して、——つまりマルクス経済学の具体的研究を通して——この業績をなしたとげたのであつた。それはいくつかの経済学の領域での業績でもあつたが、同時に哲学・論理学の領域における右のような業績でもあつたのである、したがつてこの弁証法と形式論理学との根本についての見田氏の仕事はその後大きな反響をよびおこして來ている。

向井氏の今回の著作は、この見田氏の学説の上になつて、これをより明確にし、一般読者に理解し易いものにしたところに先ずその功績があるといえよう。見田氏の業績はその永年にわたる巨人的な悪戦苦闘の成果であつたから、必ずしもわかり易いとはいえない点がある。これをより体系的に理解し易い形にしていく仕事は今後とも必要な作業であらう。

向井氏はその第一部の最後の論文「分析的方法を基礎とする弁証法的方法とどういうものか」を中心にこの仕事を行っている。彼は見田氏の思想を「唯物論を徹底するからこそ

弁証法的な立場に」立つという明確な方法的自覚に貫かれた思想であり、その方法は「分析的方法を基礎とする弁証法的方法」として特徴づけられるのだと述べている。通常マルクス主義の方法といえは「下向の道」と「上向の道」を思い浮べ、探究の過程と叙述の過程とを、また分析の過程と総合の過程とを切り離して、叙述の過程とは端初になるカテゴリーから矛盾によって自動的に具体的なカテゴリーへと上昇する道だとする「論理＝歴史説」あるいは「マルクスの方法のヘーゲル主義的理解」が、まだまだ影響力をもっているが、これに対して向井氏は見田氏の立場を次のように把握する。

「見田氏は、探究の過程と叙述の過程を関係させ、叙述の過程がどういう系統的な認識の過程なのかを明らかにする。

『具体的な対象そのものは、上昇の過程のはじめから終りまで表象に思い浮かべられていて、これの諸側面が相手の前に呈示され、その面前で分析され、既知の抽象的カテゴリーに帰着させられることが、上昇ということの具体的な内容である。だからそれは総合ではあるが、その上昇の一步一步が分析となっているのである』(『著作集』第四卷二二頁)。そして総合が具体的に事実の分析を含まねばならない積極的な理由が

『抽象的カテゴリーから具体的カテゴリーへ上昇することには……先行する抽象的な概念が後続する具体的な事実によって説明され検証されてゆく過程である』(同六〇頁)という側面にあることが示される。

「叙述の過程がどういふ認識の過程であるかを明確にしようとする唯物論的精神が、抽象によって問題の条件を純化し、本来の分析とは『対象からそれよりも抽象的なそのものの基本を分離すること』(同三七頁)『事実の背後にあって、そこに現象し、これに意味を与える本質としての普遍……その発見によって、対象のたんなる表象が概念に変わり、認識のうえに感性的認識から理性的認識への本質的な変化がおこるような普遍』(同四二頁)を分離することであることを明確にし、マルクスによる価値の実体の分析の方法論的意義を本格的に明らかにすることになったのである」。

このように向井氏は見田氏の業績を特徴づけて、このような「分析的方法を基礎とする弁証的な方法こそが唯物論的に一貫した方法である」と言う。分析と総合とはけっして対立し相容れない方法ではなく、あるいはたんに併列的で、あるときには分析が用いられ他のときには総合が用いられるとい

うような別々の方法でもない。弁証法的方法はまさに徹底した分析的方法を基礎にして成立する方法であることを向井氏は見田氏の仕事に即して論じている。見田氏の業績をそのように定式化することは適切であると評者も考えるものである。

三

ところでこのような見田氏の方法論を理解できず、われわれからみると的はずれの批判をする人々がいる。このような批判者に対する反批判を向井氏は行っている。

たとえば代表的な批判者は許萬元氏であるが、彼は見田氏が「思考と存在との二元論的分離の立場」におちいつているという。これは「理論とは何かに対してはなほだ無反省な議論である」と向井氏という。許萬元氏は「思考と存在の同一性」を主張するが、これはマルクス主義において認識論上の用語であり、客観的实在の認識可能性の問題にかかわる用語である。それを「思考と存在は同一の法則に従っているのだ」と主張するだけでは独断的すぎる。客観的实在とは区別された思考がどのように客観的实在を認識していくかの過程、それこそが問題なのである。見田氏はその過程とは一般に分析

向井俊彦著『唯物論とヘーゲル研究』（鱒坂）

・総合の過程にはかならないことを明瞭にしている。その上で、事物の有機的連関、発展的連関はどのように認識できるのかという見地から、単純な分析・総合とは区別された弁証法的方法とはどういうものなのかを明確にしていくことになるのである」。このような「分析的方法を基礎とする弁証法的方法こそが唯物論的に一貫した方法であること」を理解できないところに許萬元氏の誤解の原因があると向井氏は批判する。

したがってまた許氏が、見田氏の方法について「唯物論からは単純な分析・総合の方法を借り、概念の発生的展開のさしには弁証法的方法を借りる」という「方法的二元論」であり、「方法論的混乱」であるというときにも、それは次の二点の不十分さが許氏にあるからだと言井氏はいう。「一つは弁証法的方法の基礎としての分析・総合が明確にされていないこと。もう一つは、弁証法的方法そのものがどういふ分析・総合の形態なのか明確にしようとしないうことである。」向井氏はこのようにして、許氏に色濃く残存する弁証法のヘーゲル主義的理解を厳しく批判し、そのことを通して唯物弁証法とは何かを探究している。

また見田氏の方法論が、このように分析的方法を強調するところにその特徴があるところから、見田氏は普通の科学の分析的方法を明らかにしたただけだと考え、「他方で見田氏が発生的展開の方法を強調し、現実の矛盾の本性が論理的矛盾であると論じるのを何とも不思議に思う」傾向があるが、これも見田氏の「分析的方法を強調するその徹底した唯物論的精神こそが、弁証法とは具体的にはつきり言えば、どういふものなのかをはじめて明確にさせたのだという肝腎の点を評価できない傾向にある」と向井氏はいふ。

六〇年代以後、見田氏が弁証法の単なる図式的教科書の理解を排し、また根強く存在する「悪しきヘーゲル主義」と闘って、マルクス主義の弁証法（真に科学的な弁証法）とはいかなるものかを明らかにして来た道を、さらに前進する必要があることを向井氏は強調している。見田氏の没後も根強く「悪しきヘーゲル主義」が残存する日本の哲学界にとって向井氏の今回のような仕事は大きな意義をもっていると思われる。

四

見田氏の理論的功績として、向井氏は以上のことと関連しつつさらにいくつかの点をあげている。主要なものには①「対立」と「矛盾」とを異るカテゴリーとして峻別した点、②「普遍」「特殊」「個別」というカテゴリーの弁証法的理解を決定的に深めた点である。

①については見田氏が対立と矛盾を混同するヘーゲルの傾向を早くから批判し、「相対的価値形態と等価形態の関係」「再生産表式についてのマルクスの分析的方法論的性格」これらの「反省関係・均衡関係の分析の意義」を明確にしていたところに見田氏の功績があったと向井氏はいふ。「この反省関係（単なる対立）と現実の矛盾を峻別することが、こんどは事物の原理である現実の矛盾とは何かをはつきり問題提起することになったのである」。

こうして弁証的な矛盾とは何かという点についても「悪しきヘーゲル主義」の限界を破って、見田氏は唯物論を徹底させ、そのことによって弁証法の理解を創造的に発展させたのであったが、向井氏はこの点も的確に指摘している。

②については「見田氏は事物の本性、事物の概念を認識するとはどういうことなのかを深く探究し、主要な包括的なモメントを明らかにすることが、事物の概念を認識することであり、それが普遍・特殊・個別に関する論理学的革命を含んでいるものであることを明確にした」と向井氏はいい、普遍・特殊・個別の弁証法的把握の決定的重要性をはじめて明らかにした見田氏の功績を継承発展させる必要を力説している。

それはものごとの「主要なモメントとしての普遍」をとらえることが、ものごとの有機的連関はそれのものごとの内部のモメントの相互前提関係（対立物の統一）の論理だけでとらえることができないが、だからといって有機的全体は相互前提関係に立つ諸モメントに対して第三者なものではなく、その「主要なモメントとしての普遍」をとらえることによって有機的全体ははじめて正しくとらえられるということである。

「土台と上部構造の相関関係において土台が主要なモメントであり、社会には主要な生産関係があり、資本の諸形態の関係において産業資本が主要なモメントであり、資本の生産

過程と流通過程において生産過程が主要なモメントであり、絶対的剰余価値の生産と相対的剰余価値の生産において絶対的剰余価値の生産が主要なモメントであり、可変資本と不変資本において主要なモメントが可変資本であり、もっぱらこの主要なモメントにおいて資本の概念を捉えること、このように普遍が特殊の上に立つものでなく普遍自身が主要なモメントとしての一つの特例において分析的に確定されること、これが事物の有機性を捉える唯物論的な仕方であり、そしてこの唯物論が、普遍概念について形式的論理学的なそれと弁証法的なそれとの区別を明らかにするのである」。

このように向井氏は見田氏の学説を要約して、この普遍の捉え方が「発生的展開の方法」「概念からの展開の方法」の意味を明確にさせるといふ。「普遍が一つの特例において捉えられる」ことによって、その「特殊としての普遍」からさらにすすんで、それが前提する前に捨象された特殊を説明するのでなければ、本当に自分の脚で立った概念だということにはならないことが明らかにになり、かくて萌芽としての概念からの展開の方法をとらざるをえなくなる理由が説明されるのである。つまり見田氏は「論理Ⅱ歴史説」にみられる「悪

しきヘーゲル主義」に反対したけれども、「概念からの発生的展開」そのものに反対したのではなく、商品や価値や資本の概念が表象を分析してはじめて得られることを明確にし、それらの概念の論理的性格を解明して、「概念からの発生的展開とはどういう分析の過程なのかをはじめて明確にしたのが見田石介氏なのである」と向井氏はいう。

このようにして、弁証法についてしばしば誤解され、理論的混乱をひきおこしている諸問題、特に見田石介氏が解明した諸問題、すなわち形式論理学と弁証法との関係、分析的方法と弁証法的方法との関係、分析的方法と発生的展開の方法との関係についての諸問題など、弁証法の根幹にふれる重要な諸問題をひきおこしている諸問題を向井氏はよく整理し、見田氏の学説に対する批判者の議論の弱点を鋭くえぐり出して、これらの諸問題を今後研究していく人々の有力な足がかりを提供している。

五

向井氏の今回の著作における氏の独自性は第二部で史的唯物論の基礎概念が論じられるときに一層鮮明である。

第二部の第一論文「哲学の根本問題と実践概念」は、マルクス主義哲学の中心カテゴリーは何かという問題をめぐる六〇年代後半の東ドイツにおける論争を手がかりに、マルクス主義における「実践」概念の検討を行っている。東独における論争は実践概念がマルクス主義哲学の中心カテゴリーであるとするザイデルらの議論に対して、様々な視点から反論が出され、やがてコージングがこの論争の総括的な論文を書いて、ザイデルらの一面性を批判したのであるが、それでも「物質」「意識」「実践」の三つが根本的で体系を規定するカテゴリーであると結論して、論争は一応の終結を見たのであった。

向井氏はザイデル説にもコージングの総括にも難点があるとし、この論争で「物質——意識」のカテゴリーと「実践概念」とどちらが中心カテゴリーなのかというように二者択一の問題が設定されてしまったために、コージングの説のようにどちらも重要であるという結論がでることになったと論じ、重要なのは「物質——意識」関係と「主体——客体」関係との間の関係をどのように説明するのかということであるとす。コージング、ザイデルらに共通なのは、「物

質——意識」関係が第一義的には認識論的性格のものであることが重視されておらず、同時にこのことはマルクス主義哲学における認識論の重みを軽視することになってしていると向井氏は論ずる。向井氏が次のようにいつていることも合せて、評者も全く同感である。

「実践を強調する論者が、哲学もまた実践に役立つようにしたいという主観的意図は理解できるものであるが、しかし、そもそも理論が、現実の生活過程における如何なる問題において提起されているものであるか、そしてその解決のための理論的問題とはどういう性格のものであるかを理解し、現実の問題を解決するにあたっての理論的問題の解決の困難を意識しているのであれば意味のある討論にならない。強調すべきは、理論を実践に解消しようとするようなことではなくて、実践の視点に立つからこそ理論的関心であろう。生活・実践の立場が如何にして理論的立場になり得るかを考えねばならない。」

六

第二部第二論文「史的唯物論の基礎概念について」におい

向井俊彦著『唯物論とヘーゲル研究』（鯉坂）

ては、右の第一論文の論点をすすめて、芝田進午氏や島田豊氏のようないわゆる実践的唯物論者の所説が批判される。批判は大体次の諸点である。

(一) 実践的唯物論者は「史的唯物論」唯物史観が、社会の領域にまで拡大された唯物論、即ち唯物論を社会に適用したものであるということ」を軽視している。これは歴史の主観主義的な見方に道を開くおそれがあると向井氏はいう。

(二) 実践的唯物論者は経済的社会構成体という概念を、「土台と上部構造を統一的に総括したマルクス主義の社会概念」とはみないで、単に「生産諸関係の総体からなりたつ概念で上部構造は含まない」とみているが、これは「イデオロギー的社會關係が意識を通過して形成されるにしてもそれ自体客観的な關係であり、したがって、二つの客観的關係としての物質的社會關係とイデオロギー的社會關係との間の關係を客観的に認識しようとしないう考え方」であり、結局は「歴史学や法学が科学として成立するための基礎を掘りくずしてしまふことになる」と向井氏は批判する。これに対して向井氏は藤田勇氏や林直道氏の理論を支持している。

実践的な唯物論者は「創意あふれる実践を強調し……一見

もっともに思えるが、これでは科学的な社会主義のどこが科学的なのか、分らなくなってしまう。実践的誤謬は何を根拠に訂正するのか、創意的実践が何を根拠に正しいものと言えるのか、さっぱり分らない」と向井氏がいうとき、全く評者も同感である。

七

第二部第三論文「歴史の必然性と主体——人間の自由や主体性にとってなぜ必然性の認識が重要なのか」においては自由と主体性の問題が論じられている。

(一) まず粟田賢三氏や秋間美氏などが従来マルクス主義が「必然性と関連させた自由」を重視して来たが、これとは別種の「市民的・政治的自由」をも重視すべきであり、両者は統一されるべきであるという見解を述べたのに対して、向井氏は疑問を提出する。すなわち右の二つの自由はなら原理的に異なるものではないだろうという。「市民的・政治的自由は唯物論の学説になじまないのではなくて、唯物論の自由論である行動の自由には、当然、市民的・政治的自由が含まれているのである」。向井氏はここに見られるように唯物論的自

由論を「意志の自由」論としてではなく、「行動の自由」論としてとらえるべきだと主張している。このような立場からたとえばエンゲルスの意志の自由についての考えは混乱しているというような意見に対して、エンゲルスが論じているのは「行動の自由から位置づけられた意志の自由」なのであって、混乱はないという。

(二) 主体性の概念について、かつてのいわゆる主体的唯物論者が、「マルクス主義を非常に図式的に捉えた上でそこに別の原理として主体性を入れようとして来た」が、これは唯物論的とはいえないやり方であると向井氏は批判する。今日の実践的唯物論をとなえる人々も同様であって「主体—客体弁証法」や「実践」を強調しさえすれば、ただちに実践的・主体的立場に立ったかのように受けとるのは早合点であるという。「人間が社会を変革できるのは、社会を実践的に考えるからではなくて、社会の客観的な発展法則の認識に基づく実践を行なうからである」といい、実践的唯物論者を鋭く批判している。

(三) 唯物論とヒューマニズムの関係についても同じことがいえるとして、実践的唯物論を批判する。実践的唯物論者は

「唯物論が人間きらいでないために科学的な精神とヒューマニズムの精神を統一しなければならぬ」というふうのことを言うが、これも結局は唯物論の外から、ヒューマニズムと云った理念を導入するやり方である。「ヒューマンなものをはんとうに大切にするには、人間的なものが何で、何が非人間的なものかを唯物論的に分析するのだからなければならない」と向井氏はいいい、ヒューマニズムを強調するにも唯物論の精

神が堅持されねばならぬこと、それには何よりも事実を分析して正確にとらえる唯物論的認識論が堅持されるべきことが主張されている。たとえば「社会を階級的視点から見るといふよりも、それがいかなる階級社会なのかを分析し、抑圧された階級の勝利の必然性を認識するのがほんとうに科学的な精神であろうし、ヒューマニズムと言うなら、唯物論はそういうヒューマニズムなのである。」といいい、ヒューマニズムの理念を強調するにも、その基礎により根本的な問題としての唯物論的認識と科学的精神がなければならぬ点を向井氏は強調している。

「主体的であることはもちろん大切なことだが、社会を変えようというだけで社会が変わるわけではない……対象の実

践的把握を強調する人がえてして実践そのものを分析せず、理論を実践に解消しようとする傾向があるのに対し、強調すべきは実践的視点に立つからこそもつ理論の関心であり、労働・生活・実践を分析し、その変化を捉えることであり、それに立脚する主体性であろう」。ここには徹底的な科学的唯物論的精神が強調されている。

八

紙数の関係で第三部についてはほとんどふれる余裕がないのだが、ヘーゲル哲学の哲学史的研究として大層すぐれた仕事であることを記しておく必要がある。

特に第一論文「ヘーゲル疎外論、その現実的基礎と論理について」は、カントからヘーゲルそしてマルクスにいたる射程の長い哲学史的展望の中に、ヘーゲルの疎外論を位置づけて論じたものである。

よくありがちな単なる文献実証だけでなく、また当時の社会的経済的情況の中に単に歴史的に位置づけるだけのやり方でもなく、文献実証と歴史的な位置づけをふまえて、ヘーゲル疎外論の論理の展開を分析して大層読みの深い研究と

なっている。

全体として、この著書は唯物論哲学、マルクス主義哲学は認識論的性格を第一義とすること、実践やヒューマニズムや主体性といった理念がどんなに大事であるからといって、そこから出発するのは正しくないということ。何よりも事実の分析から出発するのが唯物論だと主張されている。

「社会科学の認識以外の何らかの原理を補足しようということ、科学的精神とは区別された哲学的精神とかを強調しようとする考え方は、科学的精神の理解の狭さを示」しているとい、このような考え方が「科学の上に立つような哲学を求めがちなものに対して、哲学はもっと科学的でなければならぬ」と思う」と向井氏が強調するとき、今日の哲学界の情況を鋭く突いていて、評者としても深く共感を感じるのである。